

2022年度第1回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎカッコ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字は楷書^{かいしょ}で、一点一画でいねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一次の文章は、乾ルカ『明日の僕に風が吹く』の一節です。主人公「有人」は、中学校のクラスメートである「道下」が食物アレルギーによるショックのため倒れたとき、放っておくことができずに人工呼吸を試みようとした。しかし、人工呼吸はこの場合に意味をなさない処置であり、その一部始終を見ていた友人たちから「有人」は軽蔑の言葉を浴びせられた。「有人」は自室にひきこもり不登校を続けたが、中学を卒業後、叔父の「川嶋先生」が常駐医として赴任している離島の高校に入学したのだった。

これに続く以下の場面は、島にやって来た「小西さん」という観光客が発作を起こした日のことを描いたものである。文章を読んで、後の問に答えなさい。

(注1) 涼先輩の父が通話先にいつそう大声で問い返した。

「え？ エピ？ (注2) エピペン？」

有人の心臓が硬く縮まり、続いて一気に膨らんだ。あの日覚えた、忘れようがない単語。ステイックのりみたいな形状のあれ。めくられたスカート。養護教諭の白衣。

「……保健の先生」有人は呟いていた。「学校の、保健の先生は」

あのと道下に処置をしたのは、養護教諭だった。しかし、(注3) 誠が即座に首を横に振った。

「島の外から来た先生たちは、みんないない」

そうだった。教職員住宅には人の気配が無かった。冬休みが明けるまではまだ一週間あるのだ。

「エピペンってのを使えばいいのか？」涼先輩の父が、(注4) 森内にがなる。

「診療所にエピペンってのはあるか？ エピペンだ」

森内の答えのかわりに、有人は過去の音を耳にした。【A】棚の戸を開ける音だ。診療室にあった薬剤を保管する棚に、六月に来島していた(注5) 柏木が、二本のエピペンをしまっていた。

もし、あの日と同じなら。あの人が道下と同じなら。でもわからない。間違えるかもしれない。黙っていても誰も責めない。

なにも、しなくてもいい。

なにも動かなければ。

——有人。

——1 未来の自分を想像してみないか。

そのとき有人は、(注6) 叔父の声を聞いた。

進んだ先にあるもんなんだよ。

——動け。行動しろ。

誠の父と(注7) 和人の声も。そして。

——俺は出る。

誠。

突如、凄まじい向かい風が吹きつけてきた。息もできないくらいの風だ。

それを真正面から受ける。

前に進むときに感じるのは、必ず向かい風だ。

元旦の海に消えたマフラーがまなうらをよぎる。【B】

有人は足を踏み出していた。

*

観光客の男性は、小西さんといった。ヘリで a ハンソウされる際、同乗の医師に名を問われ、自分で答えた。

「エピペンを打ったのは君？」小西の(注8) バイタルを確認した医師は、小さく頷いた有人に大きく頷き返した。「ありがとう、頑張ったね」

やりとりはあつという間だった。【C】ヘリはすぐに小西を乗せて、北海道本島に飛び去った。

ドクターヘリのライトが星に紛れてしまうと、有人はどすと雪の上に尻もちをついた。

「なした、有人」

大人たちが訊いてくるが、なにも答えられない。キャパシティを超えた緊張からようやく解放され、力がすっかり抜けた有人は、立ち上がることでできなかつた。

怖かった。今になって震えが有人を襲う。

「でも、よくやったなあ、有人」

「あの、カチッてやるやつ使い方、よく知ってたな」

大人たちが口々にねぎらう中、涼先輩が涙ぐんで有人の前に膝をついた。「有人くんが帰ってきて、本当に良かった……」

「涼ちゃんも大変だったな。さ、帰るべ帰るべ」誠の父が有人の頭にぽんと手を乗せた。「今夜のヒーローも帰るぞ」

「……俺は」

「そんな格好で雪の上に座ってたら風邪ひくべ。ガタガタやってるしよ」

集まっていた人々は、三々五々帰りはじめている。こんな大騒動があつても、数時間後には船に乗って海に出る人たちのなだ。涼先輩も両親に連れられて去っていく。何度もbナゴリ惜しそうに有人たちを振り返りながら。

「親父。先帰つてろよ。俺、ちよつとここで一休みしてから、有人を寮に送つてく」

「そうか」誠の父は深追いしなかった。「なら、そうせ」

自分が着ていた防寒服を有人に投げてよこして、誠の父は車で去っていった。さつきまでの喧騒が嘘みたいに静かなグラウンドだった。誠が兄のように防寒服を有人にはおらせた。有人は少し魚臭い温かみに包まれながら、空を見上げた。月は削がれたように薄く、そのぶん満天に広がる星の光は強い。

「小西さん、写真ちよつとは撮れたかな」誠が隣に腰を下ろした。「こんな空、俺らには普通だけどな」【D】

「……ここ、すごくきれいに……ほ、星が見えるよ」歯の根が合わず、声にも力が入らない。

「夏の……花火のときも……そう思った」

「ふーん」誠は天を仰いだ。「全然関係ないけど、さつきのおまえ、おまえじゃないみたいだった」

誠の爪先が、器用に雪を有人へと蹴り上げてくる。目をやると、誠はにかつと笑った。

「すげーな、有人」

「……す、すごくないよ。全然」言葉が夜に白く漂う。「全然すごくないんだ……だって、あれを知っていたのには……わけがある」

あまりに気が抜けて、心のガードもcユルんでしまっている。有人は両手で顔を覆った。

「僕は……医者になりたかったんだ」

星の下で、雪の上で、有人は叔父への憧れを抱いた幼い日のこと、それから、悔やみ続けたあの日の一部始終を話した。

すべて聞き終わるまで、誠は口も挟まず、寒そうなのそぶりも見せなかった。話し終えると、有人の震えも治まっていた。

「そっか」誠は立ち上がった。「その道下さん、元気になってよかったな」

「……うん」

「今夜のこと、教えてやれよ」

「え、なんで？」

「いや、なんとなく。2その子なら喜ぶんじゃないかと思った」(中略)

「もしも□がなかったらって、ずっと思つてた」手の中の雪玉を、握つて潰す。「こんなことになってないのにつて」

「でも、もしも□がなかったら、小西さんはヤバかったな」誠は尻についた雪を素手で払い落とした。「今はどうなのよ」

「今？」

「今は□のこと、どう思つてんだよ？ やっぱ、なかったほうがいいのか？」

有人はもう一度雪玉を作って、今度は誠に投げつけた。誠がやり返してくる。

「なあ、なんで今夜は行つたんだよ！ あのととき！ 涼ちゃんと小西さんのところに！ エピペンのありかど打ち方知ってるつて！」

打ち方なんて、一度見ただけだった。【E】もちろん、電話での確かな指示を出し続けてくれた医師のサポートは大きいけど、ともかく有人は名乗り出てやり遂げた。

「涼ちゃんのことを好きだからかよ！」

「ま、誠って馬鹿だろ！」

誠は笑いながらグラウンドを駆けだした。

「……誠だつてわかつてるくせに」

叔父の言葉を知っている誠なら。

あのとき有人は、一瞬で未来の自分を考えた。【F】十年後、二十年後の自分を想像して、今を振り返った。黙って突っ立っている己を後悔しないか考えた。

次に思い出した誠の父、兄、それからなにより誠の声。

号砲みたいだった。

「あのさ、有人！ 救急車のかわりにドクターヘリがあるとか言うけどさ、俺や親父含めて島に住んでる人は、どっか覚悟してるところあんだよ」誠は飛び去ったヘリが雪面に残した跡の上に立った。「なんかあつたら、しゃーない。駄目なときは駄目だつて。都会じゃもしかしたら助かるかもしれないけども、ここじゃどうしようもないときがある」

「……うん」

「それでもさー。俺らだつて人間だから、せめて医者がいたら、あわよくばすげー医者だつたら、もしかしたらつて思う」

「……うん」

「俺ら、川嶋先生ならいいやつて思ってたんだ。なんかあつて結局駄目でも、診てくれたのが川嶋先生なら諦めつく。最善を見つけてくれる、絶対それをやつてくれるつて信じられた」

土日もたゆまず資料に目を通していた叔父の姿が思い起こされる。「うん……わかる」（中略）

誠の声がどんどん大きくなる。

「川嶋先生、やつぱすげーよ。その、善きサマリア人の法？ ヤバイ状態の人を救うために最善を尽くしたら、結果が伴わなかったとしてもおとがめなしみたいな決まり、日本にはないのに、機内で名乗り出て助けたんだろ？」

有人は懸命に首を縦に振る。

「俺、そのときの川嶋先生、どんなだったかわかる。小西さんのところに向かつてったおまえだ。3 おまえ、川嶋先生に似てた」

まるで、全世界に自慢するように、怒鳴る。

「おまえ、あのとき、すっげー、かつこ良かった！」

かつて一度は消えた灯が、その瞬間、もう一度生まれた。

（乾ルカ『明日の僕に風が吹く』[KADOKAWA]より）

注 1 涼先輩……有人が通う高校の先輩。

2 エピペン……食物アレルギー等によるショック症状を和らげる注射。

3 誠……有人が通う高校の同級生。

4 森内……島の診療所の事務職員。

5 柏木……本島の大病院に勤務する研究医。川嶋先生を慕っていた。

6 叔父……川嶋先生は、この少し前に癌のため他界している。

7 和人……有人の兄。

8 バイタル……脈拍・血圧など、患者の生命に関する基本的な情報。

問1 傍線部 a と c のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 次の一文を入れるのに最もふさわしいのはどこですか。本文中の A と

F より選び、記号で答えなさい。

しかし、脳裏に焼き付いていた。

問3 傍線部 1 「未来の自分を想像してみないか」とありますが、ここには

川嶋先生のような思いが込められていますか。次の空欄にふさわしいことばを二十五字以上三十字以内で補って答えなさい。

有人に、二十五字〜三十字、ということを考えて行動してほしい。

動してほしい。

問4 傍線部 2 「その子なら喜ぶんじゃないか」とありますが、誠がこのよ

うに思ったのは、有人の話に、どのような内容が含まれていたからだと考えられますか。その内容として最もふさわしいものを次から選び、記号で

答えなさい。

ア エピペンをはじめとする医療器具の使い方を学び直し、医師になる決意を早く固めてほしいと道下は言った。

イ かつて川嶋先生がそうしたように、うまくいくという確信を得てから行動に移した方がよいと道下は言った。

ウ 確かとは言えない医学的知識を用いて医師の真似をするのはよくないことだと思う、と道下は言った。

エ 有人が傍観するのではなく、自分に人工呼吸を助けようとしてくれたことを嬉しく思っていると道下は言った。

問5 三か所の□に入る最もふさわしいことばを、「*」以後傍線部2以前の本文中から探して、書き抜きなさい。

問6 傍線部3「おまえ、川嶋先生に似てた」とありますが、誠がこのように言った理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が窮地に立たされる可能性のあることを知りながら、有人は自らエピペンを打ったから。

イ 善きサマリア人の法を守ることよりも、目の前で苦しむ病人を救うことを有人は優先したから。

ウ 緊急時であっても医師ではない人間による処置は認められないのに、有人は名乗り出て治療を施したから。

エ たとえ結果が伴わなかったとしても、患者にとって諦めがつく最善のことを有人はやり遂げたから。

オ 過去のあやまちを反省し、川嶋先生と同じく患者本位の姿勢を有人は崩そうとしなかったから。

問7 本文中には、医師になりたいという有人の気持ちをとえた一語があります。それを、傍線部2より後の部分から書き抜きなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

本書は、「小説の読み方入門」をテーマにした本である。

って誰でも分かる。だって、この本のタイトルに書いてあるから。

これって意外と面白い話だ。あなたは、この本の内容をなんとなく分かっているから、読もうと思つてこの本を手取る。

でもこれ、小説だとあまりない現象なのだ。小説は、「タイトルだけではどんな話か分からない」本だから。

たとえばこの瞬間、あなたが小説を書店で買うとすれば。それは、「タイトルで惹かれても、中身が面白いかどうかは分からない」という博打をしているも同然だ。(中略)

じゃあ反対に、タイトルから内容が想像できる本って何だろうか？ たとえばビジネス書。実用書。あるいは、自己啓発本。

自己啓発本って、本の中でもぶつちぎり「タイトルから中身が想定できる」ジャンルだ。というか、分かりやすいタイトルじゃないと買ってもらえなさそう。たとえば有名な自己啓発本の『7つの習慣―成功には原則があった!』なんて、タイトルですべて本の内容のオチまで言ってしまった。この本を買う読者はもちろん「成功する原則とされる7つの習慣が知りたい人」だろうし、本の中身とタイトルの印象がちがった! なんて齟齬もないはずだ。

そんなわけで、まったくちがうジャンルだと思われる小説と自己啓発本だけ。実は、小説も、ある種、自己啓発本と同じ効用があるのではないか。

(中略)

なぜなら、小説も、自己啓発本も、「現在の自分が抱えている、どうにもならない不安」を抜いっつ、それに対して作者が「私はこう考えてるよ、私もがんばってるから、あなたもがんばろう」というものだから。

人生を過ごすのに、不安や、痛みや、苦しみは、避けられない。――小説も、自己啓発本も、これを前提としている。

人生は、悩まされるものだ、と。

ただその悩みの行きついた先に「読者の解釈にゆだねられた結末」がある

か、「読者の解釈が定まっている結末」があるか、のちがいが分かりやすい自己啓発本と分かりづらい小説の差を生み出している。

小説は、基本的に「私はこんなふうに悩みを持つてるよ。それで、その悩みに対してこう考えたり、こんな体験をしたりしたけれど、まあ、これが解決になったかどうかは、あなたの解釈にゆだねるよ。ていうか、解決なんてしないかもしれないけど」と伝える（ことの多い）メディア。もちろん作品によつては「悩み、完全解決！」といえる結末を用意してくれることもあるけど、たとえそのような勧善懲悪小説であっても、それが本当にハッピーエンドかどうかは、読者が決めていい。

反対に、自己啓発本の場合は、「私はこんな悩みを持つてるよ。それで、こうやって解決したよ！」と伝える。結末を解釈にゆだねてはいけない。結末は作者が用意して、それを読者に渡すものだ。これが自己啓発本のルール。今抱えている悩みに対する結末を、どういうふうに、読者に渡すか。1小説と自己啓発本では、異なる。（中略）

で、この「悩みのためのモノ＝小説」という事実は、小説のタイトルが分かりづらいことと関係している（タイトルの話、まだ続きます。長くてごめん！）。

なぜなら先ほど言ったように、小説は扱う「悩み」に対して、明確な答えを出さない。その答えはきわめて不明瞭なことが多い。その2悩みの正体を綴っただけで終わることもある。

たとえば、夏目漱石は『門』で「夫婦ってなんなんだよ」という悩みを扱った。が、『門』のなかで夏目漱石は「夫婦ってなにか」に明確な答えは出さない。というか、物語の主人公ですら、「夫婦ってなんだろうな」なんてとくに言わない。小説の中でただすることといえば、門の前に立ち尽くすことだけである。夫婦という悩みを扱って、門の前に立つ。意味が分からない。解決もしていない。もちろん答えもない。だけど、それがひとつの小説になっている。

そしてこの物語を、夏目漱石は「門」と名付けた。それは、そうとしか名付けられなかったからだ。「俺と仲の良いはずの妻のあいだに子どもがいな

いという件について」なんてタイトルはつけられない。だって、『門』という小説が扱っている悩みは、ただ夫婦の話だけじゃなくて、その夫婦を取り巻くもつと複雑に入り組んだ悩み全体のことから。

実際、私たちが人生で抱く悩みなんて、ひとことではしつと名付けてしまえるほど単純じゃない。

たとえばもしあなたが自分と妻の問題について悩んでいたとしたら、そこには自分の仕事が今どういう状態か、とか、そもそも結婚することになった青春時代の経緯とか、さらに妻の幼少期から続く性格や親戚事情とか、自分の昔持っていた理想のありかたやそれを作った父母の関係とか、現在の経済事情や社会事情とか、それはもういろんな要素が絡み合った状況を、「夫婦」という切り口で悩んでいるにすぎない。ひとくちに「夫婦の問題」とか言ったって、それは□の一角で、おそらくもつと問題は根深い。だからこそ私たちは悩む。絡まりすぎてほどこけない糸を、どうしようもかなあ、と眺める。本当は、夫婦の状態だけが問題じゃないはずなのだ。ちよつとどうにかしようとしてみたって、本当は問題なんて解決しなくて、だけどそこに問題があることはたしかだ。

で、その状態を夏目漱石は「門」と言った。いや言ったわけじゃなくてタイトルんだけど、夫婦を扱った小説の中で夏目漱石は「門の前に立ち尽くすしかなかった主人公」を描くに至った。

この場合、タイトルが「俺と仲の良いはずの妻のあいだに子どもがいな」という件について」と、「門」だったら、どちらが、より悩みに対して誠実で、的確だろう？ 「悩んだけど解決しなかった」と言うのと、「門の前で立ち尽くすしかなかった」と言うのでは、どちらがより状況を誠実に描写しているといえるのだろうか？ どちらが、より、私たちに、その悩みの深さを伝えてくれるだろうか？

たしかに「門」だけのほうが、分かりづらい。というか、一見しただけでは、分からない。だけど実際に小説の文脈を知り、その悩みにいつたん共感してしまつと、私たちは、「門」と名付けた夏目漱石を信頼せざるをえない。少なくとも、私はそうだ。きっと私が同じようなことで悩んでいたとしたら、「ああ、夏目漱石は深く悩み、深く考えてくれている」とほつとしたらろう。

自分よりこの悩みについて考えている人が、ここにいたんだ、と感じるだろう。

それ——つまり「門」とかいう一見分かりづらくて複雑なタイトルは、分かりやすく直接的なタイトルよりもっと、実は、伝わるものの多い表現なのだ。

だからこそ、小説は分かりづらいタイトルをつける。一見、なにが書いてあるか分からないタイトルを。内容を私たちに事前に教えてくれない言葉で。それは不親切に見えるかもしれない。自己啓発本みたいにうまいタイトルつけるよ、と思うかもしれない。だけど、分かりやすさ以上に、小説と同じ深さの悩みを持った読者に対して、**3 小説のタイトルは、誠実であることが大切だ。**それが小説のタイトルのルールである。(中略)

私は、小説のタイトルは分かりづらくあるべきだ、と思う。だって、えんえん語っているように、小説のタイトルは、悩んでいる、苦しんでいる読者に、「俺のことを信頼してよ」って説く誘う文句だから。それは、「俺はきみと同じくらい、またはきみ以上につらいよ」って言うものだからだ。

小説は、「ちゃんと自分以上に悩んでいる、苦しんでいるやつがいる」って教えてくれる。悩んでいるのは、苦しんでいるのは、つらいのは、自分だけじゃない。この問いについてここまで考えている人がいる。その一点を感じるためだけに、私たちは小説を読む。ずっと読む。ずっと読んできたのだ。昔から。

だから、今つらい人はもちろん、今つらくない人も、小説を読んだらいいのになあ、と私はやっぱり思ってしまう。だって、あなたがつらくなつたとき、小説は唯一寄り添ってくれる存在かもしれないよ。

(三宅香帆『読んだふりしたけど』ぶつちやけよく分からん、あの名作小説を面白く読む方法』〔笠間書院〕より)

問1 傍線部1「小説と自己啓発本では、異なる」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 小説の主旨は読者が作者の思考に基づき適切に解釈するものだが、自己啓発本において読者は解釈をしてはならない。

イ 小説の作者は難解な悩みの過程しか描かないが、自己啓発本の作者はさらにその明快な結末まで表現している。

ウ 小説では悩みの行き着く先が読者の視点にゆだねられているが、自己啓発本では作者がそれを完全に指定してしまっている。

エ 小説に描かれる悩みにはこれといった解決がないが、自己啓発本に描かれる悩みには読者が納得する正しい答えがある。

オ 小説のタイトルは読者の悩みのために練られたものであるが、自己啓発本のタイトルは読者が誤解しないことを重視したものである。

問2 傍線部2「悩みの正体」とありますが、それはどのようなものですか。

『門』の内容に基づいた次の説明の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 夫婦仲が良いので子供が生まれると思っていたが、子どもが生まれないという悩み。

イ 自分と妻は成育歴の違いがあるため、家庭の理想の在り方が異なってしまうという悩み。

ウ 夫婦の問題は取り巻く状況が入り組んでいるために、その状況が解決しないという悩み。

エ 当時の経済事情や社会事情の問題について夫婦という切り口で描写できるかという悩み。

オ 夫婦の問題を「門」というタイトルのひとことで表して象徴化できるかという悩み。

問3 に入る最もふさわしいことばを漢字で答え、慣用句を完成させなさい。

問4 点線部「タイトルから内容が想像できる」「分かりやすいタイトル」とありますが、このような自己啓発本に対して、小説のタイトルはどのようなのですか。次の空欄に入る最もふさわしいことばを より後の本文中から十字程度で探して、書き抜きなさい。

内容を 十字程度 タイトル。

問5 傍線部3「小説のタイトルは、誠実であることが大切だ」とありますが、それはなぜですか。次の X X・ Y にふさわしいことばを、
X は十字以上十五字以内、 Y は五字以上七字以内で補って答えなさい。

たとえば「門」というタイトルは、作者が X 十字〜十五字 ということ表現することができ、そのようなタイトルを持つ小説を読んだ人は、小説とは Y 五字〜七字 ものだと受け止めるから。

問6 次の中から本文の内容に合うものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 勸善懲悪小説は扱われる悩みが浅く、一見主張が明確であるが、かえって読者は受け取り方を考えさせられる。
- イ 小説と自己啓発本はどちらも、人が生きる上での痛みや苦しみに作者が向き合った結果として生まれたものである。
- ウ 作者が悩みの本質に迫ろうとするあまり抽象的な内容になった小説は、悩みに共感できない読者にとっては難解である。
- エ 読者は自分の悩みにそったタイトルを探して小説を選ぶので、的確なタイトルは豊かな読書経験のために重要である。

オ 小説は、簡単に片づけられない悩みを持つ人間にとっては、孤独から解放され、安心するために読むものである。

カ 我々が小説を読むのは、いかに思慮深い作者であっても悩みの解決は難しいということを知り、自分を慰められるからである。

「以下余白」

